

[081_03] 法政研究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/1475343>

出版情報：法政研究. 81 (3), 2014-12-17. 九州大学法政学会
バージョン：
権利関係：



九州大学教授 植田信廣 先生

植田信廣先生は一九五〇年一月に高知県に生まれ、一九七四年に東京大学法学部を卒業後、同大学院法学政治学研究所の修士課程、引き続き博士課程に進学、法制史学の泰斗石井紫郎教授の指導の下、日本法制史の研究者としての道を歩まれることになった。一九七八年には博士課程の途中で東京大学助手に採用され、九州大学には一九八四年四月に助教として着任、一九九二年五月に教授となられた。

主たる研究領域は鎌倉幕府の裁判であり、学会誌である『法制史研究』に掲載された最初の刊行論文「鎌倉幕府の裁判における『不論理非』の論理をめぐって」（一九七九年）以来、一貫して日本中世法の特質、とりわけ鎌倉幕府の刑事裁判の実態解明にあたってこられた。代表作「鎌倉幕府のへ検断」に関する覚え書き」等、いくつもの論文が本誌にも掲載されている。他方、中国法にも強い関心を寄せられ、北京大学の武樹臣教授の著書の翻訳『中国の伝統法文化』（九州大学出版会）を出版された。定評ある教科書『日本法制史』（青林書院）の共編者の一人であり、また『法制史研究』を中心に数多くの書評も執筆している。法制史学会では、一九九八年以来長年にわたって理事を務めている。

教育面では、鷹揚でありながら同時に細やかな気配りを示される先生のお人柄に惹きつけられて、学部ゼミには常に多くの学生が集まった。ゼミ論文集『×群（ばつぐん）』は、一九九三年度の創刊号以来二〇年以上続いている。また、大学院で先生の指導を受け、研究者として学界で活躍中の弟子の数は少なくない。中には中国からの留学生もいるが、中国の諸大学との学術交流、学生交換留学の進展に大いに寄与されたことも特筆すべきであろう。

大学の管理・運営面で先生が果たされた貢献は、誰でもが認めるに違いない。学務委員長、二度に及ぶ研究室主任、総長補佐、評議員等の要職を経て、二〇〇三年七月から二〇〇六年三月まで、二期二年九ヶ月にわたって研究院長・学部長・学部長を務められた。この間には、二〇〇四年四月の大学法人化と法科大学院の創設があり、九州大学全体にとっても、また法学部にとっても極めて多難な時期であった。この時期に、植田先生という名舵取りを得たことは私達にとつて幸運なことであった。何事にも手抜きすることなく真摯に取り組まれた先生のおかげで、難局を乗り切ることができたように思われる。退職間近になって、先生は、学内行政に関わる最後の仕事として、九州大学百年史の「一部局史編」編集委員会の委員長として手腕を発揮された。その成果については、ぜひ本誌次号を参照していただきたい。

長い間、九州大学法学部の一つの柱として活躍してこられた先生の定年退職にあたり、心からの感謝の念と惜別の思いを込めて、また先生の今後ますますのご健勝とご活躍を祈念しつつ、本記念号を献呈するものである。